

「高橋新太郎文庫」展示

カレイドスコープ

～昭和文芸の万華鏡～ 目録

(於 2009 年度 尾道大学 日本文学会大会)

このたびの展示では、膨大な尾道大学所蔵「高橋新太郎文庫」から、演劇・戦争・戦後雑誌（含新聞）の三つの視点を切り口としてその一部を公開します。

<演劇と文芸>

高橋新太郎文庫には、演劇関係資料が豊富です。ポスター・パンフレットなど貴重な資料も少なくありません。

今回の展示では、三島由紀夫に関わる資料を複数展示します。

① 歌舞伎名作公演『三島由紀夫作品連続公演Ⅲ』（歌舞伎座、1973年4月）

三島の死より約二年半後、歌舞伎座で行なわれた三島作の歌舞伎公演パンフレット。「むすめごのみ 帯取池（おびとりのいけ）」など、「三島歌舞伎の中で代表的な物」（円地文子）三作が公演された。戯曲『サド侯爵夫人』・戯曲集『近代能楽集』（新潮社、1956年4月）など三島文学と演劇・古典芸能との関係は深い。当資料もそのことを側面から物語る資料のひとつである。

② 『浪漫劇場』第6号「薔薇と海賊」（劇団浪漫劇場、1970年10月）

三島由紀夫作「薔薇と海賊」の公演パンフレット。当パンフレットは、彼の死の直前（1970年10月～11月）に行われた〈劇団浪漫劇場〉による再演時のもの。澤田重隆の美しい装丁デザインに加え、パンフレットに掲載された文章中の「至福の猥褻さは、死の猥褻さに似てゐる」という三島じしんの言葉も注意を惹く。

③ 『青年座』劇団青年座 第一回公演パンフレット（劇団青年座、1954年12月）

〈青年座〉の初公演、喜劇「第三の証言」のパンフレット。演目原作者は椎名麟三。椎名のあいさつに加え、三島由紀夫・武田泰淳・安部公房など著名作家の祝辞が掲載されている。初公演日の初日を発行日とする、文字通り〈青年座〉生誕を伝える資料である。同劇団の創立時のメンバーには、山岡久乃・初井言榮らがいる。

④～⑧ 『民藝の仲間』 62, 63, 66, 72, 79 号〈番号順に〉(劇団民藝、発行年月記載無し)

〈劇団民藝〉によって発行された雑誌。各号の表紙・デザインは、優れた芸術家・デザイナーによって手掛けられている。〈劇団民藝〉は、滝沢修・清水将夫・宇野重吉らにより民衆に根ざした演劇芸術をつくり出そうと、1950年4月に創立された。展示資料は、尾道大学所蔵の『民藝の仲間』のなかから、デザイナー・画家として著名な横尾忠則がデザインに関わっているものを選出した。

⑨ 『キネマ旬報』臨時増刊 名作シナリオ集 (キネマ旬報社、1958年7月)

〈キネマ旬報ベスト・テン〉など、映画界において論壇をリードし続けてきた『キネマ旬報』。当資料は、尾道ゆかりの映画監督でもある日本映画の巨匠・小津安二郎にとって節目の作品となる、初のカラー映画『彼岸花』のシナリオを掲載している。1958年5月に公開された『彼岸花』は、この年のキネマ旬報ベスト・テンの第3位に選ばれている。

〈戦争とジャーナリズム〉

高橋新太郎文庫には、昭和期のものを中心として、なまなましく時代を物語る資料が数多く含まれています。

⑩ 『東京日日新聞』 太平洋戦争開戦関連記事 1941年12月8日付 夕刊

太平洋戦争の開戦の詔書が発せられたことを報じる記事。写真には決意宣言をする東條英機首相が写り、記事本文には対米交渉が打ち切りになった経緯と、天皇によって宣戦布告の詔が出されたという主旨が記されている。日本の近代史における大きな出来事を伝える歴史資料であるが、紙質の劣化が激しい。

⑪ 『東京日日新聞』 太平洋戦争開戦関連記事 1942年1月1日付 朝刊

昭和17年元旦の記事。前年12月8日の真珠湾攻撃を大きく取り上げている。「国宝(こくほう)的記録写真」として、大寫しの真珠湾の写真には「激闘中の機上撮影」とある。この歴史資料も紙質の劣化が甚だしい。

⑫ 『キング』新年号(大日本雄弁会講談社、1942年12月)

「日本一おもしろい、日本一為になる、日本一安い雑誌」をモットーに一世を風靡(ふうび)した大日本雄弁会講談社発行の大衆雑誌。「宮本武蔵」の吉川英治が、そのペンネームを初めて使用したのも同誌上。展示資料は、戦闘機が表紙に描かれていることから明白なように戦時色が濃厚である。当資料掲載の「敵方百人一首」を見ると、日本人に親しまれてきた百人一首すら時局に利用されていることがわかる。

⑬ 『キング 改題 富士』 六月号 (大日本雄弁会講談社、1943 年 6 月)

展示資料⑫『キング』誌は、時局がひっ迫してゆくなかで、誌名を変更せざるを得なくなる。「キング」という言葉が、当時<敵性語(てきせいご)>とされたためである。よって『キング改題 富士』が発行された。雑誌名の変遷を通じ、戦争中の日本の言論界のありようを浮かびあがらせる歴史資料であるが、劣化が激しい。

⑭ 『日の出』 11 月号 (新潮社、1945 年 11 月)

『日の出』は、新潮社が、圧倒的な部数を誇っていた講談社『キング』に対抗して、発刊した大衆雑誌 (1932 年 8 月創刊)。「編集後記」は、終戦後『日の出』11 月号をようやく「一部の地域の読者には約半年ぶり」に届けられることになったと記す。いまだ戦火の余燼くすぶるさなか、出版界の再生への鼓動を伝える資料。

<戦後の大衆文化と文芸>

狭い意味での文学・学問を逸脱するものにも、その時代の文化の息吹が感じられます。ひとつの枠にはまらない高橋新太郎文庫の多彩さがうかがわれます。

⑮ 文藝春秋臨時増刊号『漫画讀本』 6 (文藝春秋新社、1955 年 9 月)

『漫画讀本』は 1954 年～1970 年まで文藝春秋新社より発刊されていた漫画専門雑誌。展示資料には、漫画界の巨匠・手塚治虫「昆虫少女の放浪記」の初出が掲載されている。

⑯ 『少女ブック』 付録「人気スタア総出演 新春仲良しアルバム」 (東京集英社、1955 年 1 月)

『少女ブック』1955 年 1 月号の付録。『少女ブック』は 1951 年に創刊し、はじめての B5 判少女雑誌として好評を博した。前年の 1954 年、初めて紅白歌合戦に出場したばかりの美空ひばりと、子役・童謡歌手として活躍していた松島トモ子が表紙を飾っている。斬新とも言えるアルバムの形にも注目されたい。

⑰ 『リべらる』 創刊号 (大虚堂書房、1946 年 1 月)

同誌はいわゆる〈カストリ雑誌〉の代表的なものとされているが、このたび展示する「創刊号」は、武者小路実篤・菊池寛ら著名な文化人を執筆者にむかえ、文学・政治・文化論などの各分野にわたり格調高い内容となっている。グラビア記事・掲載対談・裏表紙がいずれも英会話学習奨励というコンセプトで統一されている。

⑱ 『別冊宝石』 60 号 文芸作家推理小説集 (宝石社、1956 年 11 月)

1946 年 4 月から 1964 年 5 月まで、宝石社発行の推理小説雑誌。当資料は、〈文芸

「高橋新太郎文庫」展示

作家推理小説集)と銘打った、井上靖・武田泰淳・中村眞一郎ら純文学系の作家たちによる推理小説特集という異色の企画。特集外でも、坂口安吾・松本清張・大岡昇平ら、推理小説作家という枠組みにとらわれない豪華執筆陣が寄稿している。

⑬, ⑭, ⑮ 川端康成 ノーベル文学賞受賞関連記事 『朝日新聞』、『讀賣新聞』、『東京新聞』(番号順に) 1968年10月18日付 朝刊

川端康成が、日本人初のノーベル文学賞を受賞した際の新聞。「文学水準世界が認める」(『朝日新聞』)、「日本文学への認識を高める」(『東京新聞』)などの言葉が紙面に跳躍している。

「高橋新太郎文庫」とは、日本文学研究者・高橋新太郎氏(学習院女子大学名誉教授・1932年5月5日～2003年1月11日)が、その生涯をかけて蒐集した膨大な蔵書・資料群の総称です。

高橋新太郎氏は、日本近代文学研究者としてはもとより、秋篠宮殿下の恩師のひとりでもあり教育者としても有名な人物でした。稀代の書籍・資料の蒐集家でもあった高橋氏の没後、およそ7万冊もの膨大な蔵書が残されました。この7万という数は、すでに個人の蔵書の域を越えた図書館規模のもので、そこには多くの貴重な書籍・資料が含まれており、たびたび国内の研究者からの照会や公共機関による展覧会・展示会への資料貸し出しの依頼も寄せられています。

「高橋新太郎文庫」はそのすべてがご遺族によって、高橋氏の勤めていた学習院女子大学と尾道大学とに寄贈されて、保管されており、ひろく文学研究や歴史研究に資することを目的に、現在整理・調査が進められています。

2009年12月19日

＜高橋新太郎文庫展示準備チーム＞

尾道大学日本文学科3年：上林 尚子，大脇 友美，永尾 優美，長谷崎 郁美，
藤田 沙十美，松下 香絵，三好 加奈，見分 小百合，
山田 沙紀

指導教員：柴 市郎(日本文学科)

[市立] 尾道大学

〒 722-8506 広島県尾道市久山田町 1600 番地

日本文学科 高橋新太郎文庫展示準備チーム

TEL 0848-22-8311(代) FAX 0848-22-5460

E-mail jimukyoku@onomichi-u.ac.jp

[付記]

※本展示目録は、2009 年度尾道大学日本文学会大会において配布した展示目録を転載したものである。